

第26回新人シナリオコンクール応募作品

「じじじゃないぞっか」

本田七海

登場人物

宮原 和樹(17) 高校一年

森永 乙女(17) 高校一年

太田 龍矢(17) 高校一年

マナ (17) 高校一年・龍矢の彼女

トオル(大川徹)(40) 会社員

宮原 正浩(50) 和樹の父

宮原 恵子(49) 和樹の母

太田 紀夫(56) 龍矢の父

太田 美佐子(55) 龍矢の母

太田 邦江(77) 龍矢の祖母

太田 孝介(24) 龍矢の兄

森永 清美(46) 乙女の母

田中 (17) 高校一年・和樹と同じクラス

小杉 (42) 和樹 乙女の担任

勇氣 (18) 高校二年・乙女の彼氏

スカウトの男

カラオケ・個室

暗い室内。

宮原和樹（17）がソファの上立つて、ピョンピョンと跳ねている。

頭の後ろには監視カメラ。

手にはマイクを持ち、きゃりーぱみゅぱ

みゅの「キミに100パーセント」を歌っている。

和樹「ボクの気持ちの100パーセント。

届け届けキミに。そんな気持ちの何パーセ

ントも練習がたりないけど。ボクの気持ち

の100パーセント。届け届けキミに。い

つも変わらず元気でみんな笑顔になれるよ」

ソファの下、太田龍矢（18）と彼女

のマナ（17）が床に座り込んでキスを

している。

龍矢、マナを押し倒し、胸を揉む。

和樹、時折二人を見下ろす。

龍矢、マナのスカートの中に手を突っ込

み、愛撫する。

マナの呼吸が段々と荒くなっていく。
龍矢、ズボンを脱ぎ、マナに挿入する。

和樹「……」

曲が終わり、一瞬部屋がシンとなる。
が、すぐに次の曲の前奏が始まる。
和樹、歌わずに二人を見ている。

龍矢、腰を振りながら和樹を見る。

龍矢「歌えさ」

和樹「……」

龍矢「はよ」

和樹、マイクを構え、きやりーぱみゅぱ
みゅの『PONPONPON』を歌う。

和樹「あの交差点で、みんながスキップを
して、もしあの街の真ん中で手をつないで
空を見上げたら……」

龍矢、動きが早くなる。

マナの声が大きくなる。

龍矢も声を漏らしている。

二人、果てる。

和樹「……」

龍矢、マナ、床に寝転がる。

マナ「（笑って）ねえ、選曲！」

龍矢「興奮したろ？」

マナ「まじ途中笑いそうになった」

和樹「……」

龍矢、コンドームの端を器用に結んでい
る。

龍矢「まだ終わっとらんばい」

和樹「……」

和樹、続きを歌う。

マナ「ウケる」

龍矢、コンドームをマナに投げる。

マナ「はあ！きたな！」

マナ、指でつまんで龍矢に投げ返す。

龍矢「汚のーなかし、な！」

龍矢、今度は和樹に投げる。

歌っている和樹、咄嗟にキャッチしてし
まう。

同・トイレ

手洗い場に立つ和樹。
ペーパータオルを取って、コンドームを
包み、ゴミ箱に捨てる。
和樹、手の匂いを嗅ぐ。
手を洗い、トイレを出る。

同・個室

和樹、部屋に戻って来る。
マナがマイクを持って歌っている。
龍矢、ソファに寝転びスマホを見てい
る。

和樹、龍矢の隣に座る。

マナ「ねえ、プリクラ行こー」

龍矢「まじ言いよ？」

マナ「うん」

龍矢「えー」

マナ「ねー、行きたい、行きたい、行きたい、
行きたい」

龍矢、ため息まじりに起き上がる。

同・表

和樹、龍矢、マナ、車道に向かって立っ
ている。

龍矢「どうやって、行くと？」

マナ「歩いて」

龍矢「はあ、バカじゃなか」

マナ「いけるやろ」

龍矢「えー！地味に遠いけん」

和樹「：：」

龍矢「和樹も行く？」

和樹「え？」

マナ「はあ、なんで？」

和樹「：：帰るよ」

龍矢「そっか」

龍矢、指を三にして、和樹に向ける。

和樹、ポケットから財布を出し、龍矢に

3千円を渡す。

龍矢、受け取り、ポケットにしまう。

龍矢「タクシー使お」

龍矢、前に出て、車道にタクシーを探す。

和樹「…じゃあね」

龍矢「おう」

マナ「そいぎねー」

和樹、駅に向かって歩いて行く。

佐賀県道29号線

車が走る中、和樹が駅に向かって歩道を歩いている。

他に歩道を歩いている人はいない。

ヘルメットを被った中学生たちが自転車で和樹を追い越して行く。

佐賀駅南口前交差点（スクランブル）

和樹、赤信号で止まっている。

歩行者用信号が一齐に青に変わる。

それを渡るのは和樹ただ一人。

メンテナンス

「ここじゃないどっか」

高校・4階の廊下

それぞれの教室の前に椅子が二つずつ置いてある。

教室から出てくる生徒とその親。

椅子に座って待っていた生徒とその親が中に入って行く。

4組の前、森永乙女（17）が一人、椅子に座って自分の順番を待っている。

窓の外を見れば、連なる山々と高速道路。高速道路を走るのは運送のトラックばかり。

乙女、トラックが山の中のトンネルに吸い込まれているのを見ている。

教室から担任の小杉（42）が出てくる。

小杉「まだ？」

乙女「はい」

小杉、ため息をつく。

乙女「すいません……」

小杉、腕時計を気にしながら教室に戻って行く。

乙女、窓から身を乗り出し、真下の地面を見る。

バタバタと母の清美（46）が階段を駆け上がってくる。

清美 「ごめん、ごめん」

乙女、教室の扉を開け、中に入る。

高校・教室

四つの机が組み合わせられ、その一つに担任の小杉が座っている。

乙女 「来ました」

小杉、立ち上がる。

清美、ハンカチで汗を拭きながら入ってくる。

清美 「すみません、ちょっと、仕事の都合がつかなくて」

小杉 「いえいえ。どうぞ、お座りください」

清美 「あ、はい」

乙女と清美、小杉の向かいに座る。

小杉も席に着く。

小杉「小杉、清美の前に乙女の成績表を置く。」

小杉「これが、ここ一年の模試の結果です」

清美「ハンカチで扇いでいる。」

小杉「：どうぞ、ご覧ください」

清美「あ、はい」

清美「成績表を手にとって、見る。」

清美「：どう見るんですか？」

小杉「：え？（乙女に）見せよらんと？」

乙女「見せてます」

清美「うそー」

乙女「見せよるけん」

清美「（小杉に）すみません」

小杉「あ、いえ：」

乙女「：：」

清美「成績表を見ている。」

清美「（乙女に）なんこい！」

乙女「：：」

小杉「：：」

清美「ガタツて落ちてるじゃないですか」

小杉「ああ、はい」

清美「ま、いいんです。本人の自己責任な
んで」

小杉「……」

乙女「すいません」

小杉「進路とかはどうお考えですか？」

清美、乙女の肩を叩く。

乙女「今は、何も」

小杉「（清美に）何かありますか？」

清美「とりあえず大学には行っていただい
て。その後はもう、本人が何をしたいかだ
と思うので、任せます」

小杉「はい……」

清美「今はまだ、特にやりたいこともない
たいなのでとにかく勉強してもらえれば、
です」

乙女「……」

小杉「どがん？」

乙女、首を傾げるだけ。

清美「ちゃんと答えなさい」

乙女「……がんばります」

小杉「何を？」

乙女「……全部」

校内・駐車場

乙女、清美、歩いている。

清美、車のキーを開ける。

清美「お母さん、仕事戻るけどよか？」

乙女「うん」

清美「あんだ、ちゃんと考えなさいよ」

乙女「うん」

清美「後からネチネチ言われても、嫌けんね」

乙女「言わんし」

清美「いいけん、考えときなさいよ」

乙女「はい」

清美、運転席に乗り込み、車を発進させる。

同・駐輪場

乙女、止まった自転車に股がり、ペダルを空漕ぎしている。

部活帰りの生徒たちが自転車を取り、校門を出て行く。

勇気（１８）が歩いてくる。

勇気「乙女」

乙女、その声に振り返る。

乙女「あ、お疲れ様」

勇気「ねー、聞いて聞いて」

乙女「何？」

勇気「佐大、B判定でた！」

元気、模試の結果を見せる。

乙女「わー、すごいやん」

勇気「やる？ まじ嬉しい」

乙女「おめでとう」

勇気、乙女を乗せたまま、鍵を開け、スタンドを外す。

乙女、乗ったままバランスを取っている。

公園・人気のない場所

乙女、勇気、ベンチに座っている。

乙女「まじさ、調子いい時だけ考えてる振り

せんでほしいさ」

勇気「うん」

乙女「いつもはどうでもいいくせして、外面

だけ母親して」

勇気「うん」

乙女「どう思う？」

勇気「うん」

乙女「まじパパの気持ち分かるわ。自己中すぎ
て終わってる」

勇気「うん」

乙女「ごめんね、愚痴って」

勇気「いいよ」

勇気、乙女の手を握り、微笑む。

乙女「…どう思う？」

勇気「ん？」

乙女「…」

勇気「大丈夫だよ」

勇気、乙女にキスをする。

乙女、目を瞑る。

勇気、乙女の体を抱き、舌を絡ませる。

乙女、勇気の背中に腕を回す。
勇気、服の上から乙女の胸を揉んでいく。
徐々に制服のボタンを外し、手を中へ。
乙女の息が荒くなる。
勇気、乙女の乳首を舐める。

乙女の家（マンション）・リビング
乙女、入って来て、鞆を置き、リモコン
でテレビを付ける。
部屋の電気を点け、椅子に座る。
テレビからバラエティ番組の明るいナ
レーションが聞こえる。
乙女、テーブルに足を上げ、制服を脱ぎ、
下着姿になる。
テーブルの端から虫刺され用のムヒを取
って、蚊に刺された箇所（全部で50箇
所くらい）に塗っていく。

和樹の家・リビング

和樹、制服姿でソファーに寝転んでいる。

テレビでは九州、沖縄地方の天気予報。
佐賀県には高温注意のマークが出てい
る。

母親の恵子（49）が台所で洗い物をし
ている。

恵子「和樹！」

和樹「うん」

恵子「時間大丈夫と？」

和樹「うん、あと五分」

恵子「なんがあと五分ね！」

和樹「……もう」

和樹起き上がり、鞆を持って玄関へ向か
う。

同・庭

築15年ほどの一軒家。

和樹、車庫から自転車を出す。

自転車に股がり、発進する。

家の目の前には広い田園。

龍矢の家の前

築60年以上の一軒家。

和樹、家の前で自転車を止める。

表庭に龍矢の自転車。

後輪がパンクしている。

和樹、それを確認すると、また発進する。

学校（日替わり）

数学の授業中。

黒板に関数のグラフが書かれている。

四、五人の生徒たちが自分のノートを見

ながら答えのグラフを書いている。

その中に和樹の姿。

和樹、自分のグラフを書き終わると席に

戻る。

全員が書き終わり、教師が答えを見なが

らグラフに丸を着ける。

教師、グラフを消す。

教師「はい、次」

教師、席の方に歩く。

和樹の前には、乙女が座っている。

教師「(乙女を指して) 問い 1、森永」

と、その列の生徒に問題を指定していく。

教師「(順番に前に) 2、3、4、5」

指名された生徒たち、前に出て、黒板に
答えを書き始める。

乙女、遅れて席を立ち、前に出る。

他の生徒が書き終わるのを待って、自分
の答えを書く。

生徒たちが席に戻る。

教師、乙女のグラフにバツを大きく書いて、訂正する。他の問題は全て丸。

教師「これが、できんて、やばかばい」

教師、グラフを消す。

乙女、話を聞かず爪の甘皮を剥いている。

教師「じゃあ、次」

和樹、乙女の後ろ姿を見ている。

同・駐輪場

掃除の時間。

乙女、ほうきで落ち葉をはいている。
他の女子達が道具を持ったまま、たむろして話している。
和樹は田中（17）と一緒に花壇の草むしりをしている。

田中「なあ」
和樹「何？」
田中「森永さんって、可愛いのに、なんでハブラれてんの？」
和樹「さあ」
田中「普通、可愛いやつのに集まるっちなやなかと？　女子って」
和樹「：ああ、確かに」
田中「なんで？」
和樹「自分も可愛いって思いたいからやる。可愛いやつのに男子も集まるし」
田中「そっか」。：じゃあ、なんで？」
和樹「何が？」
田中「森永さん、なんでぼっちなの？」
和樹「まさか、好きと？」

田中「はあ？ あいつ俺の先輩の彼女ばい」

和樹「へー」

田中「知らんやつたとかて」

和樹「…それない、よかやん。幸せそうで」

田中「どうやろうねー」

同・教室（放課後）

生徒たち、帰宅や、部活の準備をして教室を出て行く。

田中「じゃあね」

と、サッカーの部活バッグを背負った田中、サッカー部の群れの中に消えて行く。

続々と教室から生徒たちが出て行く。

和樹、鞆に教科書などを入れる。

前の席の乙女、机に突っ伏してスマホゲームをしている。

和樹、立ち上がり、椅子を蹴るようにして机の中に入れる。

乙女、その音に反応して、振り返る。

和樹「…あ、すみません」

乙女、向き直る。

和樹、教室を出て行く。

乙女、ゲームを続ける。

田んぼ道

自転車を走らせる和樹。

龍矢の家の前を通り、自分の家の車庫へ

突っ込む。

和樹の電話が鳴る。

和樹、電話に出る。

和樹「：もしもし。うん：」

龍矢の家の前

和樹、自転車で来て、止まる。

玄関から龍矢が出てくる。

龍矢「おう！ コンビニ行こーぜ」

龍矢、和樹の自転車の籠に財布とスマホを入れる。

龍矢「大変な。夏休みも学校で」

和樹「まあね」

龍矢「そがん、勉強したか？　おいにはわか
らん」

和樹「パンク、直さんと？」

龍矢「あー」

龍矢、自転車の荷台に乗り、和樹の肩を
持つ。

龍矢「はよ、免許ほしかー」

和樹、自転車を発進させる。

デイスカウトショップ・店内

和樹、龍矢、レンタルDVDの棚をうる
うると歩いている。

龍矢「見て見て」

龍矢、際どい下着の女が写ったDVD
を指す。

和樹、龍矢に呼ばれて、それを見る。

龍矢「お前、こがんと借りれさ」

和樹「なんで」

龍矢「一人ですつとにいるろーもん」

和樹「…いらん」

龍矢 「なん、スマホ？」

和樹 「違うし」

和樹、目線を逸らして歩き出す。

龍矢 「『どーてー』には丁度いいばい」

和樹、無視して棚の周りを歩く。

龍矢、また映画を選んで行く。

コンビニ・店内

龍矢、店内をうろついている

和樹、龍矢の後ろを着いて行く。

和樹 「彼女は？」

龍矢 「友達と遊びだっ」

龍矢、カップ麺のコーナーでカップ焼き

そばを選ぶ。

龍矢 「よし、これ」

龍矢、カップ焼きそばを一つ取る。

龍矢 「お前は？」

和樹 「え？ ああ…」

和樹、横のお菓子コーナーからポテトチップスを取る。

龍矢 「はい」

龍矢、カップ焼きそばを和樹に渡して店を出る。

和樹 「……」

和樹、レジへ向かう。

龍矢の家の前

和樹、自転車を止める。

龍矢、荷台から降りる。

龍矢 「じゃあ」

和樹 「うん」

龍矢、玄関の中に入って行く。

龍矢の家・リビング

龍矢 「ただいま」

龍矢が中に入っていると、父親の紀夫（56）がテレビを見ながらビールを飲んで
いる。

母親の美佐子（55）、台所で夕飯の準備
をしている。

龍矢「もう飲みよつと？」

紀夫「よかろうもん」

龍矢「別よかけどさ」

龍矢、コンビニ袋を持って台所に行く。

美佐子「なん買ったと？」

龍矢「アイスと焼きそば」

龍矢、袋からアイスを出して冷凍庫に入

れる。

龍矢「食わんでよ」

美佐子「食わんし」

龍矢「なんで、何本目？」

美佐子「3」

龍矢「は。よう飲ますつね」

美佐子「色々あつとさ」

龍矢「また、ばあちゃんとケンカしたと？」

美佐子「ちよつとね。色々あつとさ」

龍矢「なん、色々て」

紀夫「…なんかー、飲んじゃいかんとか！ お

い！」

紀夫、台所に来る。

龍矢「せからし」

紀夫「はあ？　なんてかあ？」

龍矢「なんも、言つとらん」

紀夫「うそばつけー」

龍矢「母さん、メシできたら呼んで」

龍矢、部屋を出て行く。

同・龍矢の部屋

龍矢、ベッドに寝転び、イヤホンを着ける。

スマホを操作して曲を選ぶ。

きゃりーぱみゅぱみゅの音楽が、イヤ

ホンから漏れ聞こえる。

同・庭（日替り）

和樹、自転車に乗り、発進する。

龍矢の家の前

寝間着姿の龍矢が立っている。

和樹が通りかかり、止まる。

和樹 「：おはよ」

龍矢 「学校、早くね？」

和樹 「うん」

龍矢 「今日チャリ貸して」

和樹 「え？」

龍矢 「マナが天神行きたいらしい」

和樹 「：：」

龍矢 「貸して」

和樹 「昨日言ってくればよかったのに」

龍矢 「今決まったもん」

和樹 「そう：」

龍矢 「お願い」

和樹 「：：」

龍矢 「本当に」

和樹 「：今日だけね」

龍矢 「まじ？　ありがとー」

和樹 、自転車から降りる。

龍矢 「お礼すっけん」

和樹 「：：」

和樹 、籠から鞆を取り、ハンドルを龍矢

に渡す。

龍矢、自転車を受け取る。

龍矢「いつてらっしゃい」

和樹「……」

和樹、龍矢の前髪を触る。

龍矢「なん？」

和樹「……寝癖」

龍矢「きも（と笑う）」

和樹、歩き出す。

田んぼ道

和樹、歩いている。

同・自習室

カーテンが閉め切られている。

後ろに下げられた教室の陰で、乙女と勇

気がキスをしている。

勇気、乙女の肩を押しやり、自分の股間

に乙女の顔を押し当てる。

乙女、顔を上げる。

乙女「え、やだ」

勇気「大丈夫」

勇気、ズボンのチャックを開け、さらに

乙女の顔を押し当てる。

乙女、勇気のモノを銜える。

x x x

勇気、スマホを見ている。

乙女、机に座り、勇気の問題集をパラ

パラと捲っている。

勇気「じゃあ、そろそろ行くね」

乙女「うん。授業頑張ってたね」

勇気、乙女に近づき、キスをする。

勇気、問題集を持って教室を出て行く。

乙女、カーテンを開け、窓を開ける。

職員室

小杉の席の前に和樹が立っている。

小杉「心配するやんか、な？」

和樹「はい」

小杉「昨日、夜遅かったとか？」

和樹「いや」

小杉「親御さんは？　起こしてくれんやっ

とか？」

和樹「仕事なんで」

小杉「お前な、今日やったけん、よかつたば

つてん。これが入試の日やったらどがんす

る？」

和樹「すいません」

小杉「気をつけるよ？」

和樹「はい」

小杉「頼むぞ」

和樹「はい。すいませんでした」

同・自動販売機前

乙女、財布からお金を出している。

渡り廊下から、和樹がやってくる。

乙女「……」

和樹「……」

乙女、お金を入れ、ボタンを押す。

ペットボトルが落ちてくる。

乙女、それを取る。

乙女「え……」

乙女、出したペットボトルを和樹に見せる。
る。

乙女「……コイラなんだけど」

和樹「……え？」

乙女「いや、カルピス押したのに、コイラ

出て来た」

和樹「……貰おうか？」

乙女「……いいの？」

和樹「うん」

和樹、財布から小銭を出して乙女に渡す。

乙女、コイラを渡し、小銭を受け取る。

乙女、もう一度、小銭を自動販売機に入

れ、カルピスのボタンを押す。

ペットボトルが落ちてくる。

乙女、拾う。

乙女「うそやる（と笑う）」

またコイラだ。

乙女「（和樹に）ねー」

和樹「ドンマイ」

乙女「ドンマイじゃねーし」

乙女、財布から小銭を取ってまた自動販売機に入れる。

今度は別のボタンを押す。

乙女、落ちて来たペットボトルを拾う。

乙女、拾うと同時に爆笑する。

持っているのはコーラ。

乙女「何？ 嫌がらせ？」

和樹「さあ」

乙女、和樹にコーラを渡して、また小銭を入れる。

同・階段

三本ずつコーラのペットボトルを持った和樹と乙女、並んで歩いている。

和樹「何してんの？」

乙女「こっちのセリフやし」

和樹「……」

乙女「コーラ、嫌いっちゃけど」

和樹「ドンマイ」

乙女「：宮原くんってさ、頭良いよね」

和樹「別に、普通やる」

乙女「はー、まじ嫌み」

和樹「：：」

乙女「どうしたら頭よくなるっちらろっかー」

和樹「勉強すれば？」

乙女「はあー、わかってねー」

和樹「持って持っていたコーラを一本落とす。

和樹「あ：」

ペットボトルが階段を下って行く。

和樹「階段を降りる。

それを上から見ている乙女。

和樹「ペットボトルを拾う。

乙女「ねえ、それ開けて」

和樹「は？」

乙女「いいいけん」

和樹「バカじゃなか？」

乙女「早く！」

和樹「頭おかしいやる？」

乙女「今開けんやったら、お金請求する！」

和樹「いいいよ」

乙女「じゃあ、宮原くんが私をレイプしたつて噂流す！」

和樹「なんで？」

乙女「なんでも！ あけてって！ 3、2、

1

和樹、ため息まじりに蓋を開ける。

ペットボトルの中の炭酸が溢れ出し、和

樹の手を伝って床にこぼれる。

乙女、ケタケタと笑っている。

和樹「ありえん」

和樹、溢れたペットボトルを持って階段を上がってくる。

和樹「なんなんまじ」

乙女「怒った？」

和樹、階段を上がりきると、ペットボトルを乙女の口に当て、無理矢理飲ませる。

乙女、小さく悲鳴を上げる。

こぼれたコーラが制服に着く。

和樹、ペットボトルを離す。

乙女、手で口を拭う。

和樹「頭からかけようか思ったけどやめた」

和樹、教室に向かって歩いて行く。

同・教室

和樹、乙女、入ってくる。

乙女「今から彼氏とデートしちゃけど」

和樹「……」

乙女「どがんすつと？」

和樹「知らんし」

乙女「これじゃ、ベタベタやん」

和樹、帰り支度を進める。

乙女、ハンカチで制服を拭いている。

乙女「ねー」

和樹「…俺もベタベタなんだけど」

乙女、和樹の鞆にコーラを入れる。

乙女「あげる」

和樹「いいいよ」

乙女「こんなにいらんもん」

和樹「…じゃ」

和樹、鞆を持って教室を出る。

天神のショッピングモール・休憩スパー

ス（夕方）

龍矢、マナ、ベンチに座っている。

マナ、何枚かのプリクラを見比べている。

龍矢、行き交う人々を目で追っている。

スカートが短い女子高生、金髪の若いカ

ップル…。

プリクラには、『1年記念日』と書かれて

いる。プリクラの中、キスする二人。

龍矢「こっから、どうする？」

マナ「んー…」

龍矢「…」

マナ「（プリクラを差し出して）見る？」

龍矢「よか」

マナ「なんば、ブスってしとっと？」

龍矢「別に」

マナ「まさか人酔いした？」

龍矢「うざ」

龍矢、立ち上がる。

マナ、プリクラをバッグにしまって、立ち上がる。

街中

歩いている龍矢とマナ。

行き交う人を避けて歩く。

通りにレストランが並び、そのテラス席

ではサラリーマンや〇「たちが楽しそうに食事をしている。

ファミレス

龍矢、マナ、向かい合って座っている。

マナはチョコレートパフェ、龍矢はフライドポテトを食べている。

龍矢、窓の外から賑わう駅前を見ている。

マナ「あ、ジュースとってこよー」

マナ、グラスを持ち、ドリンクバーへ行く。

龍矢、街を見るのをやめる。

龍矢「……」

JR長崎本線・特急列車・車内

龍矢、マナ、並んで座っている。

マナ、龍矢の手を握り、龍矢の肩に寄りかかっている。

龍矢、流れる暗い景色を見ている。

佐賀駅・ホーム

龍矢、マナ、電車を降りる。

同・改札前（構内）

龍矢、マナ、エスカレーターを降りてくる。

マナ「じゃあね」

龍矢「うん、じゃあね」

マナ、改札を通り、振り返って、龍矢に手を振る。

マナ、駅を出て行く。

龍矢、電光掲示板の時刻表を確認して、
またホームへのエスカレーターを上がつ
て行く。

同・ホーム

龍矢、電車を待っている。
ホームから駅前の閑散とした景色が見え
る。
一両編成の電車が到着する。

JR唐津線・下り電車・車内

車内は部活帰りの高校生や、帰宅するサ
ラリーマンで席が埋まっている。
龍矢、運転席付近の壁に寄りかかって立
ち、イヤホンで音楽を聴いている。

小城駅・ホーム

電車が止まる。
龍矢、運転手に切符を渡し、下車する。

同・改札

龍矢、無人駅の改札を通る。

同・駐輪場

龍矢、自転車の鍵を外す。

サドルに股がり、発進する。

田んぼ道

自転車を走らせる龍矢。

乗ったまま、ライト部分を蹴ってライトを点灯させる。

和樹の家・リビング

食卓に和樹、父の正浩（50）、恵子が座り、夕飯を食べている。

和樹のスマホの着信音が鳴る。

和樹、ポケットからスマホを出して、見る。

正浩「メシの時は切っとけ」

和樹「あ、龍矢だ」

恵子「何？」

和樹「ちよつと、行って来ていい？」

正浩「メシの途中ぞ」

和樹「ちよつとだけ」

恵子「急ぎ？」

和樹「うん」

恵子「すぐない、よかよ」

和樹「うん」

和樹、席を立つ。

同・表

和樹、出てくる。

自転車に股がった龍矢が待っている。

和樹「ごめん」

龍矢「メシ食いよった？」

和樹「うん」

龍矢「煙草吸おうぜ」

山の入り口（二人の家の裏）

岩に座っている和樹と龍矢。

龍矢、自分の煙草に火をつけ、ライター

を和樹に渡す。

和樹、煙草に火をつける。

和樹「……」

龍矢、自分の腕を叩く。

龍矢「まじ、蚊の飛びよ」

龍矢、殺した蚊を捨てる。

和樹「ワツクスつけてんの？」

龍矢「うん」

龍矢、蚊を手で払う。

龍矢「がい、うざか」

和樹「うん」

龍矢「あんさ、お前、祭り行く？」

和樹「祭り？」

龍矢「今度の、栄の国」

和樹「ああ……」

龍矢「ボツチやけんな、お前」

和樹「……」

龍矢「一緒行く？」

和樹「……え？」

龍矢 「時間ある？」

和樹 「：うん」

龍矢 「じゃあ、そう言うことで」

和樹 「え？」

龍矢 「ああ、マナも一緒けん」

和樹 「：うん」

龍矢 「浴衣着るんだって」

和樹 「龍矢は？」

龍矢 「着るかて」

龍矢 、煙草をもみ消す。

龍矢 「そいぎ」

龍矢 、山を降りて行く。

和樹 「：：」

和樹の家・玄関

和樹、虫除けスプレーを体に巻いている。

田んぼ道（日替り）

自転車を漕ぐ和樹。

学校・教室

朝のホームルーム。

小杉、プリントを列の先頭の生徒に配っている。

乙女、回って来たプリントを和樹に回す。

小杉、教室を出る。

少しだけ、騒がしくなる生徒たち。

乙女、振り返り、

乙女「シミ、取れた？」

和樹「…ああ、うん」

乙女「よかったね」

和樹「うん」

乙女「あのコーラ飲んだ？」

和樹「うん」

和樹、一限目の準備をする。

乙女、前に向き直る。

同・駐輪場

乙女、ほうきで落ち葉をはいている。

たむろしている女子達、先生に注意され

ている。

和樹、田中、ザルにむしった草を集めて
いる。

田中「和樹、森永さんと話しよったね」

和樹「ああ」

田中「仲良くなつた？」

和樹「いや」

田中「いいいな」

和樹「話せばいいじゃん」

田中「無理、人見知りする」

和樹、黙々と草をむしっている。

乙女、落ち葉が入ったザルを持ってくる。

乙女「入れていい？」

田中「：うん」

乙女、落ち葉を入れる。

乙女「持って行くの手伝おうか？」

田中「あ、よかよか」

乙女「わかった」

乙女、去って行く。

和樹、むしった草をザルに投げ込んでい

る。

龍矢の家・リビング

龍矢、祖母とそうめんを食べている。

龍矢「ばあちゃん、これからなんすつと？」

祖母「何で？」

龍矢「俺、映画見たいけん」

祖母「邪魔てか」

龍矢「うん」

祖母「ちよとは家のことばせんね」

龍矢「はいはい」

二人、黙々とそうめんを食べる。

テレビは昼のバラエティ番組。

東京・原宿の若者を対象にした街頭イン

タビューが行われている。

龍矢「俺、東京の専門行こうかな」

祖母「なんば言いよるね」

龍矢「……」

祖母「向こうは、地震の多かるうもん」

龍矢「そがんと、どこにおたって一緒やろう

もんで。こないだも揺れたやん」

祖母「佐賀は揺れてもなんもなかけど、都会はビルの倒れてくつよ。恐ろし」

龍矢「バカ」

祖母「原発とか、恐ろしゆーてならん」

龍矢「ここだって、玄海の原発が爆発したら避難せんばやる」

祖母「そがんね」

龍矢「知らんやったと？ どこにおったって、

死ぬ時は死ぬて」

祖母「龍矢はここにおったがまし。外に出て

なんばするね？」

龍矢「……」

龍矢、天ぷらを口に放り込む。

リモコンでテレビのチャンネルを変える。

和樹の家・洗面所（日替り・夕方）

和樹、鏡の前で髪にワックスを着けている。

同・リビング

父がテーブルの上、パソコンで仕事をしている。

和樹、入って来て、ソファに座る。

テレビからは野球中継が流れている。

母、洗濯物を取り込んで部屋に入ってくる。

母「夜ご飯は？」

和樹「いらんと思う」

父「あんまり遅くなるなよ」

和樹「うん」

母「髪の毛、いいじゃん」

和樹「うるさか」

和樹のスマホの着信音が鳴る。

和樹「じゃあ、行ってくるけん」

和樹、ソファから立ち上がる。

母「お金は？」

和樹、ポケットから財布を出し、中を見る。

母、財布から5千円札を出す。

母「電車もあるやる」

和樹「5千円札を受け取る。」

和樹「ありがと。行ってきます」

父「気をつけるよ」

和樹「はい」

和樹「リビングを出る。」

同・庭

和樹「自転車に乗り、発進する。」

龍矢の家の前

龍矢が立っている。

和樹が自転車でやってくる。

龍矢「おう」

龍矢「和樹の自転車の荷台に股がる。」

和樹「発進する。」

田んぼ道

自転車を走らせる和樹。

龍矢「まじ、ねみー」

龍矢、和樹の背中に額を付ける。

和樹「……」

龍矢、和樹の背中に頭突きをし始める。

和樹「……」

小城駅

券売機で切符を買う和樹と龍矢。

駅は、これから祭りに向かう中高生たちで賑わっている。

和樹と龍矢、ホーム出て、電車を待つ。

学校近くの道

乙女、勇気、公園に向かって歩いている。

浴衣を着た女子中高生が駅に向かっていている。

勇気「あ、今日、祭りか」

乙女「うん」

勇気「知ったった？」

乙女「うん」

勇気「よかねー、遊べて」

乙女「大学入ったら、いっぱい遊べるさ」

勇気「でも、そしたら、今度は乙女が受験生

やん」

乙女「そっか……」

勇気「二年後やね」

乙女「……うん」

公園

乙女と勇気、木の陰で立ったままキスをしている。

勇気、乙女の胸を揉む。

手を下にやり、スカートを捲る。

乙女、その手を掴む。

乙女「今、あれ中」

勇気「……そっか……じゃあ、舐めて」

乙女「……は？」

勇気、乙女にキスをし、乙女の手を自分の股間に当てる。

乙女、抵抗するが勇気の力に勝てない。

勇気、乙女の手を握ったまま公衆トイレに連れて行く。

乙女「ちよつと、待って、いやだ、ねえ」
勇気、乙女を男子トイレに連れ込む。

男子トイレ

勇気、乙女の腕を引っ張り、個室に入る。

乙女「…ねえ、いやだ」

勇気「いいけん」

勇気、ズボンのチャックを開ける。

乙女の肩を押し、座らせる。

乙女、仕方なく勇気のモノを銜える。

勇気、乙女の頭を持ち、動かす。

勇気「…ごめん」

勇気、乙女を立たせ、スカートを捲る。

乙女「本当、無理で」

勇気「大丈夫、大丈夫」

勇気、乙女の下着を下し、挿入する。

乙女「…」

勇気、ピストンを早め、果てる。

同・外

勇気、スマホを見ながら立っている。

トイレ・個室

乙女、トイレットペーパーで股間と足に流れた血を拭いている。

白いソックスに血が付いている。

唐津線・上り電車・車内

祭りに向かう中高生に混ざって乙女が乗っている。

乙女、裸足でローファーを履いている。

祭り開場・出店通り

和樹と龍矢、浴衣姿のマナが歩いている。

マナ「えー、うち、たこ焼き食べたい」

龍矢「買ってこんね」

マナ「一人で行くと？」

龍矢「すぐ行くけん」

マナ、たこ焼き屋の屋台の方に歩いて行く。

龍矢、和樹を屋台の陰に連れて行く。

龍矢「いくら持って来た？」

和樹「…え？」

龍矢「金さ」

和樹「五、六千円くらい…」

龍矢「貸して」

和樹「は？」

龍矢「マナが、やっぱ二人がiiiiって」

和樹「…」

龍矢「はよ」

和樹「…邪魔にならんごとするけん」

龍矢「どつちみち、一緒けん」

龍矢、和樹に手を差し出す。

和樹「…」

和樹、財布を出し、五千円を龍矢に渡す。

龍矢「まだ入っとるやん」

和樹、残りのお札も和樹に渡す。

龍矢「ありがと」

龍矢、お金をポケットに入れる。

龍矢「あ、あと、自転車置いてってね」

和樹「…うん」

龍矢「じゃあな」

龍矢、人通りの中に消えて行く。

祭り開場・大通り

一番大きな通りでよさこいのパレードが行われている。

沿道の観客たちの中を乙女が歩いている。通りでは、浴衣を着崩した女子高生たちがスマホで自撮りをしている。乙女、道の先に一人歩く和樹の姿を見つめる。

佐嘉神社

出店で賑わっている境内。

和樹、焼き鳥屋の屋台に行く。

店員「いらっしゃい。何にするね？」

和樹「バラ、二つ」

店員「はいよー」

× × ×

和樹、神社の隅の石に座ってバラの焼き鳥を食べている。

隣に40代の男（トオル）がやって来て、煙草を吸う。

トオル「すごかねー」

和樹「……」

和樹、小さく頷く。

トオル「一人で来たと？」

和樹「……」

トオル「へー」

和樹、二本目を食べ終える。

トオル「何歳？」

和樹「……」

トオル「一人で祭りとか、さみしいねー」

和樹、立ち上がろうとする。

トオル、和樹の服の袖を持つ。

和樹「……」

愛敬通り（歓楽街）

ホストやホステスが客引きをしたり、酔っぱらった大人たちが、道の端々で立ち話をしている。

タクシーは低速で列を作っている。

和樹、先を歩くトオルの後を着いて行く。

ビジネスホテル・一室

トオル、部屋の鍵を開ける。

トオル「どうぞ」

和樹、部屋の中に入る。

トオル「帰ろうと思えば帰れたんだけど、急ぐのとか嫌いだし、祭りやっってるし」

トオル、腕時計を外したりして、ベッドに座る。

和樹、窓の外から佐賀の街の夜景を見ている。

トオル「はい、暑かねー」

和樹、窓の外を見たまま。

トオル「シャワー、浴びてこんね」

和樹「…え？」

トオル「汗かいたるやる？」

和樹「…はい」

トオル「ほら」

トオル、和樹の背中を叩く。

和樹「…あ、はい」

和樹、シャワールームに向かう。

× × ×

ベッドの上、裸の和樹とトオル。

トオル、和樹の上になり、唇を近づける。

和樹、ぎゅっと目を瞑る。

トオル「（笑って）どうした？」

和樹、目を開ける。

トオル、軽く微笑みかけ、再び唇を近づ

け、キスをする。

和樹、また目を固く瞑る。

トオル、それを見て笑い、和樹の乳首を

舐め始める。

トオル「目、瞑とつてよかけん。そのまま好

きな人を思い浮かべてん」

和樹「……」

トオル「気持ちよくなってくるやろ」

トオル、段々下がって行き、和樹のものを銜える。

小城駅・改札

和樹、改札を通る。

同・駐輪場

和樹、自転車の前に立つ。

鍵を開け、自転車を引き出す。

田んぼ道

自転車を走らせる和樹。

和樹の家・リビング

和樹、入ってくる。

母がテレビを見ながら洗濯物を畳んでい
る。

母「おかえり」

和樹「ただいま」

母「楽しかった？」

和樹「うん」

母「なんした？」

和樹「…別に、なんも」

和樹、横切つて、部屋を出る。

乙女の家・風呂場

乙女、湯船から腕を出して、汚れたソックスと下着をもみ洗いしている。

蛇口のお湯を止め、ソックスと下着を絞る。

乙女、湯船から上がって、湯船の線を抜く。

同・リビング

清美がソファに横になって眠っている。
テーブルには缶ビールが二本と食べかけのスナック菓子が置かれている。
風呂上がりの乙女が入ってくる。

乙女、部屋の電気を保安球にし、つけっぱなしのテレビを消す。

乙女「ママ、布団行かんね」

清美「うん」

乙女「ねー」

清美「分かつとつて……うるさか」

片付けようと缶ビールを取る。

入っている方のビールを一口飲む。

乙女「にがっ。ようこがんと飲めるね」

清美「……」

乙女「ねーて」

清美「……うるさか」

乙女、ソファの横に座る。

ソファの空いているところに頭をより

かける。

ちょうど、清美の腹の辺り。

乙女、清美の体にすり寄せる。

田んぼ道

龍矢、真っ暗な道を歩いている。

龍矢の家・表

龍矢、家に着く。

車庫に、車が一台多く止まっている。

同・リビング

龍矢、入ってくる。

紀夫と美佐子が兄の孝介（24）と酒を飲んでいる。

祖母はソファに座ってアイスを食べている。

美佐子「あ、帰って来たね」

孝介「おう！」

龍矢「おー！、おかえり」

美佐子「さつき、急に帰って来たっちゃん。

毎回毎回、もう」

孝介「ごめん、ごめん」

美佐子「なーんも、ごちそう準備しとらんや

んね。せっかく帰って来たのに」

孝介「よかよ。いつも通りで」

紀夫「優しいかねー。兄ちゃんは」

龍矢「悪かったね」

龍矢「台所へいき、手を洗う。」

紀夫「龍矢、つまみ持って来て」

龍矢「……」

龍矢「引き出しからスナック菓子を取っ

てリビングに行く。」

孝介「おー、ありがとう」

孝介「龍矢から菓子を受け取る。」

龍矢「なん、夏休み？」

孝介「そう。ちよつとだけね」

美佐子「やっぱり、忙しいと？」

孝介「うん、まあ。人も足りんけんねー」

龍矢「……ばあちゃん」

祖母「はい」

龍矢「兄ちゃんは家出て、好きなことしよる

ばい」

孝介「（笑って）別に好きなことじゃないけど

ね。仕事よ、仕事」

龍矢「ばってん、都会やし」

美佐子「なん、急に」

龍矢「よかねー、自由で」

紀夫「なんが言いたかとか、お前」

龍矢「俺も卒業したら、家出るけん」

祖母「出て、なんばするね？」

龍矢「そがんと、出てみらんば分からんろ」

もん

紀夫「お前には無理くさ、勉強もできんのに。

どうせ金ばっか使って遊ぶなら田んぼで働

いたがまし」

龍矢「：いややし」

祖母「やけん、出てなんばするとねて」

龍矢「ばあちゃんは、うるさい！」

紀夫「なんか、その口の聞き方は！」

紀夫、空き缶を龍矢に投げる。

龍矢「：：」

孝介「俺のせい？ ごめん、ごめん」

龍矢、リビングを出る。

龍矢、ベッドに寝転び、タオルケットに全身包まる。

学校・教室（日替り）

男女別、出席番号順に並んでいる生徒。試験官の教師が、教卓に座り眠そうな顔をしている。

黒板には『××模試』数学、英語、国語
：とそれぞれの時間割が書かれている。

× × ×

昼休み。

グループを作って弁当を食べる生徒たち。

和樹のところ田中がやってくる。

和樹「あ、俺、お茶、買ってくるわ」

田中「おう」

和樹、財布を持って、席を立つ。

乙女、その後を追って、教室を出る。

自動販売機

和樹、お金を入れ、ボタンを押す。

乙女、和樹の後ろに並んでいる。

和樹、落ちて来たお茶を拾う。

乙女「こないだ祭りにおったる？」

和樹「……ああ」

乙女「私服のどこ、初めて見た」

和樹「……そりゃあね」

乙女「一人で行ったと？」

和樹「……友達と」

乙女「へー」

乙女、財布から小銭を出し、自動販売機に入れる。

和樹、教室へ戻ろうとする。

乙女「どれがいいと思う？」

和樹「知らんし」

乙女「ちよつと同時に押してみるけん。見よ

って」

和樹「はー」

乙女「ねー、お願い」

和樹、立ち止まって、見る。

乙女、両全部の指を使って10個のボタ

ンを同時に押す。

ペットボトルが落ちてくる。

乙女、それを拾う。

乙女「うわ、メロンソーダやん。最悪」

和樹「バカじゃないの」

乙女「私、今日の昼メシ、お稲荷さんやけん」

和樹「知らねー」

和樹、歩き出す。

乙女「まじ、最悪」

乙女、和樹の後を付いて行く。

同・教室（放課後）

模試が終わり、教室を出て行く生徒たち。

田中「じゃあなー」

和樹「部活頑張った」

田中、教室を出て行く。

乙女、和樹の机にメロンソーダを置く。

乙女「あげる」

和樹「いらん」

乙女「これ好かんもん」

和樹「買わんぎよかったやん」

乙女「だって」

和樹「メロンソーダを乙女に返す。

乙女「いらない」

和樹「乙女の鞆に入れようとする。

乙女「わあ、変態」

和樹「ため息をつき、机に置く。

乙女「うまいよ、それ」

和樹「じゃあ、自分で持って帰って」

乙女「私は嫌い」

和樹「意味わからん」

乙女「好き嫌いってあるやる？ それ」

和樹「……」

乙女「宮原くんって、好き嫌いなさそう」

和樹「……あるよ」

乙女「何？」

和樹「色々」

和樹「鞆を持って立ち上がる。

乙女「和樹の鞆にメロンソーダを入れる。

和樹「……」

和樹、教室を出て行く。

龍矢の家・リビング

龍矢、テレビを見ながらスナック菓子を食べている。

祖母、ソファに座ってお茶を飲んでいる。

テレビはバラエティ番組で、タレントが渋谷で街頭インタビューを行っている。

タレント『実際、街の人に聞いてみましょう！』
タレントの持つ、フリップには「一生行かないと思う都道府県は？」と書かれている。
いる。

タレント、街を歩き、若者に声をかける。

タレント『どこだと思えますか？』

若者1『えー、どこだろ？ 島根？』

若者2『茨城とかですか？』

x x x

若者3『（笑って）わかんない、群馬？』

タレント『ランキングでは、こうなんです』

タレントがフリッブを捲ると、大きく『佐

賀』と書かれている。

祖母「あらー」

若者1『あー、忘れてましたー』

× × ×

若者2『すみません、正直、どこ？ っ て感

じですね』

龍矢「は？ クソ童貞が、黙れ」

番組は佐賀の観光アピールに切り替わる。

龍矢、リモコンを取る。

龍矢「変えていい？」

祖母「今からがよかところやんね」

龍矢「どこがかて」

龍矢、リモコンをソファに投げる。

祖母「あんた、そろそろ自転車直さんばやな

か？ 学校始まるろうもん」

龍矢「ああ」

同・表

龍矢、軽トラックの荷台に自転車を乗せる。

軽トラック・車内

田んぼ道を走る車。

運転席に祖母、助手席に龍矢が乗っている。

祖母「パンクくらい、自分で直しきることならんば」

龍矢「うん」

祖母「教えてもらいんしゃいよ」

龍矢「うん」

龍矢、ずっとドアの外を見ている。

自転車屋・外

龍矢、軽トラックの荷台から自転車を下ろし、店の中へ持って行く。

同・中

店主が、自転車のタイヤを水に付け、穴

を探している。

祖母、真剣にそれを見ている。

龍矢も横に立っているが、あまり聞いていない。

軽トラック・車内

祖母、運転している。

龍矢「ばあちゃん」

祖母「なんね」

龍矢「駅行つて」

祖母「なんで」

龍矢「いいいけん」

小城駅

軽トラック、入り口に止まる。

龍矢、ドアを開ける。

龍矢「何円か貸して」

祖母「どこ行くと？」

龍矢「友達のところ」

祖母「たく」

祖母、財布から二千円を出す。

龍矢「行ってくるけん」

龍矢、軽トラックから降り、荷台から自

転車を下ろす。

軽トラック、発進する。

龍矢、自転車を止め、切符を買い、ホームに出る。

佐賀駅・ロビー

マナ、ベンチに座ってテレビを見ている。

龍矢、改札を通過してやってくる。

マナの部屋

布団に寝転がっている龍矢とマナ。

マナ「暑くない？」

龍矢「うん」

龍矢、床に置いてあった少女漫画を取り、読む。

マナ、リモコンで冷房を調節する。

マナ「まじ、つまらんけん、それ」

龍矢「なんで？」

マナ「夢ばかりやん。壁ドンで濡れるなら苦勞せんし」

龍矢、笑う。

マナ「理想ばかり言って、かわいそう」

マナ、龍矢の腕に入る。

龍矢、漫画を置き、マナにキスをする。

キスは少しずつ深くなり、龍矢はマナの胸を揉んでいく。

マナの息が荒くなる。

龍矢、ブラの中に手を入れ、もう片方の手で下の方を触る。

マナ、龍矢のズボンを脱がせ、股間を触る。

龍矢、マナの上になり、挿入する。腰を振る龍矢。

マナの息づかいがさらに荒くなる。

公園（夕方）

乙女、勇気、ベンチに座っている。

乙女、アイスを食べている。

勇気「うまい？」

乙女「うん」

乙女、アイスが溶けないように黙々と舐めて
めている。

乙女「今日も塾？」

勇気「うん」

乙女「何時から？」

勇気「7時」

乙女「へー」

勇気、スマホを見ている。

乙女「あんさー」

勇気「うん」

乙女「勇気が大学行くやん」

勇気「うん」

乙女「そしたら、別に他の子ともヤツていい
けん」

勇気「は？」

乙女「絶対、今より楽しいって思うっちゃん、
大学って。女の子の友達もいっぱいできる

やるうし、私よりスタイルよくて可愛い子
もおるやろうし」

勇気「そんなことないよ」

乙女「私、束縛とかしたくないし、セックス
とかそういうのは大学の人として、私とは
会いたい時にだけ会うって感じでいいよ。
高校生と大学生じゃ、一緒におれる時間も
少ないしさ、サークルとか、飲み会とか、
楽しいこといっぱいあるやる。いちいち浮
気で怒ったりせんけん、ね」

勇気「急に、なん言いよつと。そんなことす
る分けないやん」

乙女「むしろ、そうしてほしい」

勇気「は？」

乙女「アイスを舐めている。

勇気「なんでそがんこと言うと？」

乙女「だって、そう思ったから」

勇気「なん、まじ」

乙女「だって、したいのか会いたいのかわか
らんもん、最近。それない、そういう性処

理は他の人としてもらって、私はもっと別

のことで一緒にいたい」

勇気「なん、別のことで？」

乙女「：わからん」

勇気、乙女にキスをしようとする。

乙女、顔を避ける。

勇気「：：」

乙女「：：」

勇気「嫌いになった？」

乙女「：別に」

勇気「なんで？」

乙女「：したくないから」

勇気、ため息まじりに立ち上がる。

勇気「俺、行くけん」

乙女「：：」

勇気、去って行く。

乙女、溶けかけたアイスを食べる。

佐賀駅・改札前（日替り）

和樹、発券機で切符を買っている。

同・ホーム

和樹、列に並んで電車を待っている。

特急列車がホームに止まる。

並んでいた人たち、乗車口から乗り込んで行く。

特急列車・車内

和樹、座席に座って外の景色を見ている。

コンビニ袋からパンと紙パックのジュースを出し、食べる。

JR博多駅・改札

和樹、改札を通る。

駅前のカフェ

和樹、アイスコーヒーを飲んでいる。

しばらくして、隣にタオルが座る。

タオル、コーヒーを二口飲んで、すぐに席を立つ。

和樹、トオルに続くように席を立ち、店を出る。

ラブホテル

ベッドの上、和樹の背にトオルが乗って、腰を振っている。

トオル、後ろから和樹の首を締めていく。和樹の息、細くなっていく。

トオル、果て、ベッドに横たわる。

和樹、大きく呼吸をする。

トオル「苦しかった？」

和樹「……はい」

トオル「そう。でもね、こっちはすっごく気持ちがいいんだよ」

和樹「……」

トオル「シャワー、浴びて来たら」

和樹、まだ呼吸を整えている。

和樹、立ち上がり、シャワールームへ向かう。

博多駅前・ショッピングモール

エスカレーターを上がっているトオルと

和樹。

トオル「僕たち、こういう風に見える

だろうね」

和樹「さあ。どうですかね」

トオル「息子ができたら、こんな感じなのか

ない。奥さんは、女の子がいろいろ言っ

るんだけど」

和樹「結婚してるんですか？」

トオル「うん。今ね、妊娠6ヶ月」

和樹「そうなんですな」

トオル「うん」

和樹「女の人も好きなんですか？」

トオル「まさか」

アパレル店

トオル、和樹に服を当てて、選んでいる。

和樹、マネキンのように立っている。

小城駅・駐輪所

和樹、自転車の鍵を開け、引き出す。

田んぼ道

和樹、自転車で走っている。

和樹の家・リビング

和樹、正浩、恵子、ダイニングテーブルで夕食を食べている。

テーブルにいったいに並べられたおかず。正浩、恵子、テレビを見て笑っている。

龍矢の家の前（日替り）

和樹、自転車を止める。

龍矢の自転車がいないことに気がつく。

学校・教室

朝のホームルーム。

一人の学級委員が黒板に席票を書いて、もう一人が教卓でくじを折っている。

乙女、和樹の方を振り返る。

乙女「お別れだね」

和樹「うん」

乙女「寂しい？」

和樹「全く」

乙女「うそばっかい」

和樹「何？」

乙女「別に」

生徒たち、教卓にくじを引きに行く。

龍矢の家の前

和樹、回覧板を持ってやってくる。

龍矢が自転車に乗って帰ってくる。

龍矢「何？」

和樹「回覧板」

龍矢「ああ」

和樹「パンク直ったんだ」

龍矢「うん」

和樹「……」

龍矢「なん？」

和樹「なんも」

龍矢「そう」

和樹「煙草吸う？」

龍矢「よか」

龍矢、自転車を押して、家に入っていく。

和樹「……」

和樹の家・庭（日替り）

和樹、自転車に乗り、発進する。

佐賀駅・駅内にあるコンビニ

和樹、商品棚の間をうろついている。

お菓子とジュースを取って、レジへ行く。

反対側のドアから乙女が入ってくる。

和樹、会計を済ませ、店を出る。

乙女、和樹を追って店を出る。

同・改札前

和樹、切符を買って、そのまま改札を通る。

同・ホーム

和樹、電車を待つ列に並んでいる。

乙女、別の列に並んでいる。

博多駅・改札

和樹、改札を通る。

乙女も、後に改札を通る。

ショッピングモール・店内

和樹、男子トイレに入っていく。

乙女、近くの店に入る。

男子トイレ

和樹、タオルに買ってもらった服に着替え、鏡の前で髪にワックスを付けている。

トイレ前

和樹が出てくる。

乙女、和樹を追い、付いて行く。

駅前

乙女、スマホを触りながら、カフェにいる和樹を見ている。

しばらくして、タオルが来て、和樹と店を出て行く。

乙女、二人を見ている。

30代くらいの男が乙女に近づく。

男「あの」

乙女「（気づいて）…はい」

男「どこか、事務所に入ったりしますか？

モデルとか、俳優の」

乙女「…いや」

男「そっか」。僕ね、こういう芸能事務所のスカウトをしている者なんだけど」

男、乙女に名刺を渡す。

乙女、受け取る。

男「聞いたことある？　この事務所」

乙女「…ああ、はい」

男「なんかね、今、君を見てて、すごく画に

なってるな！って思ってた

乙女「：ありがとうございます」

男「どうかかな？」

乙女「：何が？」

男「興味ない？　こういう世界」

乙女「：：」

男「もし、気になったら、この番号に連絡く

ればいいから」

乙女「：はい」

ラブホテル

ベッドの上、和樹とトオル、寝転がって
いる。

トオル、煙草に火をつける。

トオル「産まれてくるなら、女の子がいいな

」

和樹「どうしてですか？」

トオル「もし男の子だったら、和樹くんと会

う時に罪悪感を感じるじゃない？　奥さん

も、若くないからね。安産だといいいけど」

和樹「もし、男と女の双子だったら、どうするんですか？」

トオル「……平等ってわけには、いかないだろうね」

トオル、煙草をにじり消す。

同・シャワールーム

和樹、シャワーを浴びている。

鏡を見る。

首にキスマークが付いている。

博多駅・改札前

和樹、電光掲示板を見ている。

服は元に戻っている。

和樹の荷物、紙袋が一つ増えている。

乙女、後ろから和樹の肩を叩く。

和樹、乙女に気づく。

和樹「あっ」

乙女「偶然」

和樹「……」

乙女「買い物したの？」

和樹「：うん」

乙女「わざわざ、博多で？」

和樹「うん」

乙女「金持ちちゃん」

和樹「違うよ」

乙女「よかなー」

和樹「そっちこそ、こんなところで何してんの？」

乙女「：さあ、わかんない」

和樹「なんそい」

乙女「帰るの？」

和樹「うん」

乙女「じゃあ、一緒に帰ろう」

和樹「やだ」

和樹、改札を通って行く。

乙女、和樹の後を追う。

同・ホーム

和樹、乙女、並んで電車を待っている。

乙女「（和樹の首を指して）これ、なん？」

和樹、手で首を隠す。

特急列車・車内

和樹、乙女、並んで座っている。

乙女、化粧ポーチからファンデーションを出して、和樹の首に塗ろうとする。

和樹「何？」

乙女「いいけん、いいけん。消しちやる」

和樹「いいいよ」

乙女「ダメやる」

乙女、指で、和樹の首にファンデーションを塗る。

乙女「いい感じ、いい感じ」

和樹「…もういい？」

乙女「うん、オッケー」

乙女、コンパクト鏡を和樹に見せてやる。

和樹、鏡で自分の首を確認する。

和樹「ありがとう」

乙女「いいいよ」

和樹「もう一回見せて」

乙女、鏡を和樹に渡す。

和樹、また鏡を見る。

乙女「あげようか？」

和樹「え？」

乙女「いいよ。他にも持っとるけん」

和樹「：ありがとう」

和樹、コンパクトを紙袋に入れる。

佐賀駅・ホーム

電車から降り、和樹と乙女。

乙女、和樹から鞆を奪い取ってエスカレ

ーターを降りて行く。

和樹、乙女の後を追う。

カラオケ店・個室

和樹、乙女、ソファに座っている。

モニターから新人歌手の宣伝CMが流れている。

乙女「なんか入れて」

和樹「いやだ」

乙女「なんで？」

和樹「恥ずかしいから」

乙女「はい」

乙女、電子パネルを和樹に渡す。

乙女「歌わんやったら、全部学校にバラすよ」

和樹「……」

和樹、電子パネルで曲を入れる。

きゃりーぱみゅぱみゅ『PONPONPON』

と、画面に表示される。

乙女「あ、きゃりーぱんぱんだ」

和樹「きゃりーぱみゅぱみゅね」

乙女「え、言えるの！　　すげー」

和樹「普通やろ」

曲が始まる。

和樹、歌おうとしない。

乙女、和樹にマイクを渡す。

和樹「……」

乙女「歌ってよ。きゃりーぱむぱむ」

和樹「ぱみゅぱみゅ」

乙女「きゃりーぱみゅぱむ」

和樹「ぱ、を強く言うといいらしい」

乙女、マイクを使って、

乙女「きゃりーぱみゅぱみゅ」

和樹「うん、そう」

乙女「ぱ！」

和樹「うん」

乙女「ぱ！ みゅぱみゅ」

和樹「うん」

乙女「好きなんだ」

和樹「俺じゃなくて、友達がね」

乙女「…よかよね。世界中に、自分のこと

を好きって言うてくれる人がおつて。幸せ

やろうね」

和樹「…どうかな」

乙女「嬉しくて、死んじゃう。嬉しくて、死

にたい」

和樹「…」

乙女「…ね」

和樹「何？」

乙女「一回、しよう」

和樹「は？」

乙女「宮原くんみたいなのとやりたい」

和樹「……なんで？」

乙女「……」

乙女、和樹の手を握り、キスをする。

乙女、キスをしながら、和樹の手を自分

の胸に持っていく。

和樹、目を瞑っている。

乙女、腕を和樹の首に回す。

和樹、乙女を押し離す。

乙女、後ろに倒れる。

乙女「……」

和樹「ごめん」

乙女「……」

和樹「……思い浮かべただけ」

乙女「……誰を？」

和樹「……龍矢」

乙女「……誰？」

和樹「……好きな人」

乙女「……男……なんだ」

和樹「…うん」

乙女「…へー、よかね」

和樹「え？」

乙女「誰かは、誰かに好かれるんだ」

和樹「…」

乙女、和樹の下にしゃがみ込み、和樹の

ズボンを脱がす。

和樹「…ちよつと」

乙女、和樹のモノを銜える。

和樹、乙女を離そうとする。

乙女、和樹の足を強く握り、離さない。

和樹、目を瞑る。

和樹、感じている。

乙女、和樹の手を握り、続ける。

和樹、イってしまふ。

乙女、離れ、和樹を見上げる。

乙女、笑っている。

乙女「…どうだった？」

和樹「…」

乙女、和樹を押し倒し、馬乗りになる。

和樹「……ごめん、無理」

乙女「なんで？」

和樹「違いすぎるけん」

乙女、和樹から下りる。

和樹も起き上がる。

乙女、おしぼりで顔を拭く。

乙女「今日ね、スカウトされたっちゃん」

和樹「へー」

乙女「何言ってるかよくわからんやったけど、

多分、褒められた」

和樹「よかったね」

乙女「……いいかな？」

和樹「うん」

乙女「きゃりーぱんぱんみたいになれると思

う？」

和樹「……なれるよ」

乙女「そうよねー。東京、東京に行かんばら

んね」

和樹、乙女、夜道を歩いている。

二人、駅前の交差点に差し掛かる。

赤信号が青に変わるのを待っている。

乙女「これ、スクランブル交差点で知ったっ

た？」

和樹「うん」

乙女「東京にあるのと同じかい」

和樹「違うやろ」

乙女「人がおるか、おらんかだけの違いやん」

和樹「もっと、違うやろ」

乙女「そうやろうかい」

乙女の家・リビング

乙女、入ってくる。

清美がテーブルでスナック菓子をつまみに缶ビールを飲んでいる。

乙女「ただいま」

清美「遅かったね」

乙女「友達とカラオケ行っちゃった」

清美「よかったねー、カラオケに行ってくれ

る友達がいて」

乙女「うん」

乙女「靴から模試の成績表を出し、テーブルに置く。」

乙女「模試の成績、少し上がったよ」

清美「成績表を見て、すぐにまた置く。」

清美「へー、それは、よかったね」

乙女「うん」

清美「まあ、頑張ってください」

乙女「椅子に座る。」

乙女「ねえ、ママ」

清美「……」

乙女「私の穴、見たことある？」

清美「なんね、急に」

乙女「私の穴はね、私のこと好きな人しか見れんとよ」

清美「……なんが言いたかど？」

乙女「……」

清美「悪かばってん、あんたはママの穴から

出て来たことやけんね」

乙女「……そうやった」

乙女、席を立つ。

乙女「ママ、おやすみなさい」

乙女、部屋を出る。

ショッピングモール・フードコート

放課後の高校生で賑わっている。

龍矢、マナ、向かい合って座っている。

龍矢、フライドポテトを食べている。

龍矢「食わんと？」

マナ「うん」

龍矢「俺、もうお腹いっぱい」

マナ「……ねえ」

龍矢「なん？」

マナ「妊娠したらしい」

龍矢「……は？」

マナ「どがんしよう」

龍矢「……」

マナ「……うちは龍矢のこと、好きけん、産みた

い。……龍矢は？」

龍矢 「…うん」

龍矢、マナに微笑みかける。

山

龍矢、岩に座って煙草を吸っている。

スマホを付けると、その光に虫が集まってくる。

龍矢、それを手で払う。

和樹の家・表（日替り・朝）

和樹、自転車を引き出し、乗る。

自転車に乗った龍矢がやってくる。

和樹 「…」

龍矢 「おう」

和樹 「おはよう」

龍矢 「今度さ、デートしようぜ？」

和樹 「え？」

龍矢 「天神いこう、天神」

和樹 「…いいよ」

龍矢 「オツケー、じゃあね」

龍矢、自転車を走らせて行ってしまおう。

和樹「……」

乙女の家・リビング

乙女が上だけ制服姿で、テレビの前に立っている。

手にはスカートを持っている。

テレビは朝の情報番組。

アナウンサー「ただいま、9時になりました。

ニュースをお伝えします」

乙女、テレビの前に立ったまま。

学校・自動販売機前

和樹、ベンチに座り、コーラを飲んでい
る。

田中がやってくる。

田中「なんしょー？」

和樹「コーラ飲みよー」

田中「昼休み終わるばい」

和樹「うん」

田中、自動販売機にお金を入れ、ボタンを押す。

田中、和樹の横に座る。

田中「森永さん、先輩と別れたって」

和樹「…そう」

田中「俺、告ろうかな」

和樹「やっぱ、好きだったんだ」

田中「うん、可愛いけんね。あと、エロそう

やし」

和樹「それだけ？」

田中「うん」

和樹「…いいんじゃない」

田中「まじ？ 脈あると思う？」

和樹「どうやるね」

田中「今度、さりげなく聞いとって、な」

和樹「わかった」

田中「よし、行くか」

田中、立ち上がる。

和樹「トイレ行くけん、先行とって」

田中「はい」

田中、去って行く。

和樹、コーラを一口飲む。

和樹の家・和樹の部屋（日替り）

和樹、コンパクトを見ながら、ファンデーションで首のキスマークを消している。

特急列車・車内

和樹、龍矢、乗車口に立っている。

龍矢、窓から流れる景色を見ている。

龍矢「お前、いい服着とるな」

和樹「そう？」

龍矢「うん」

和樹「」

龍矢「：マナがさ」

和樹「うん」

龍矢「妊娠したって」

和樹「え？」

龍矢「いつやらかしたかな」

和樹「：本当？」

龍矢 「うん、多分ね」

和樹 「……」

龍矢 「墮るす気、ないらしいけん」

和樹 「……」

龍矢 「今日はさ、もっと可愛い子を拝みたい
と思います」

と、笑う。

龍矢 「ナンパ、できるかなー」

和樹 「……」

龍矢 「まだ、お前にしか言っとらんけん、秘

密な

和樹 「……うん」

天神駅

人ごみの中、立っている和樹と龍矢。

龍矢 「ねえ、服交換しようぜ」

龍矢、歩き出す。

和樹、龍矢に付いていく。

男子トイレ・中

龍矢、和樹、入ってくる。

龍矢「入って」

龍矢、和樹に個室の中に入るように指差す。

二人、それぞれ個室の中に入る。

龍矢、ズボンを脱いで、二人の間の壁に

かける。

和樹も、ズボンを脱いで、壁にかける。

二人、互いのズボンを交換して履く。

龍矢、上の服を脱いで壁にかける。

和樹、それを取る。

和樹、服の匂いを嗅いでいる。

龍矢「おい」

和樹「……」

龍矢「おいて」

和樹、黙ったまま。

龍矢、壁を叩く。

龍矢「早く」

和樹「……」

龍矢「おい」

龍矢、また壁を叩くが、和樹は何も言わ
ない。

龍矢、個室から出て、和樹の個室のドア
を叩く。

和樹、ドアを開ける。

和樹、龍矢の服を胸に抱えている。

龍矢「何してんの？」

龍矢、自分の服を取り返そうと引っ張る。

和樹、離さない。

龍矢「何？」

和樹「」

龍矢、また服を取ろうとする。

和樹、胸に握りしめている。

和樹「本当のことを言ってくれん？」

龍矢「は？」

和樹「」

誰かが入ってくる足音が聞こえる。

和樹、龍矢を個室に引っ張り込み、鍵を

閉める。

龍矢「」

入って来た人が用を足し、出ていくのを待つ。

手を洗い、足音が遠のく。

和樹、龍矢に唇を近づける。

龍矢、顔を避ける。

龍矢 「は？」

和樹、強引にキスをする。

龍矢、和樹を押し倒す。

和樹、龍矢の手を握ろうとする。

龍矢、和樹の手を振り払う。

和樹、龍矢のズボンの裾を握る。

龍矢 「……」

和樹、龍矢のベルトを外し始める。

龍矢、抵抗して、和樹の頭や肩を殴る。

和樹、絶対に離れない。

和樹、龍矢のモノを銜え、動かす。

龍矢、思いつきり和樹の腹を蹴る。

和樹、床に倒れ込む。

龍矢、その場に立ち尽くしている。

佐賀駅・みどりの窓口

キャリアケースをもった乙女が、新幹線の切符を買っている。

係員「（切符を見せながら）では、ご確認ください。さい。佐賀発×時×分博多行き、特急みどり12号と、こちらか博多発品川着の新幹線の乗車券と自由席券です」

乙女「はい」

乙女、切符を受け取って、出口へ向かう。

同・ロビー

和樹、テレビの前のベンチに座っている。

テレビはニュース番組。アナウンサーがニュースを読み上げている。

アナウンサー「昨日、福岡県の40代男性、会社員の大川徹容疑者が男子高校生にわいせつな行為をした後、首を絞めて殺害したとして殺人容疑で逮捕されました。大川容疑者は容疑を認めており、また、以前から男子高校生らを対象に買春行為をしていた

とを供述していることが現在分かっています……

画面に大きくトオルの顔写真が映し出される。

キャスター「どうですかねー、この事件……」
コメンテーター「そうですね……」

和樹、席を立ち、改札へ向かう。

改札前

電光掲示板を見る乙女の前に和樹が現れる。

乙女「何？」

和樹「一緒に行こうと思って」

乙女「何しに？」

和樹「……」

田んぼ道

自転車を走らせる龍矢。

空を見上げる。

見えるのはただ広いだけの澄んだ空。

龍矢、上を向いたまま自転車を漕ぐ。
そのまま道を外れ、田んぼに落ちる。
しばらく倒れたまま、空を見る。
起き上がり、自転車を拾ってまた進む。

新幹線・車内

和樹、乙女、並んで座席に座っている。
和樹「あるとき、すごく気持ちよかったよ」

乙女、笑う。立ち上がった、

乙女「行こう」

乙女、和樹の手を握る。

和樹、乙女に手を引かれ、席を立つ。

二人、車内の通路を歩いて行く。

終わり